

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ／著

来住道子／訳

大義のための犠牲: スウェーデンチーム、人命救助へ

大義のためなら、大なり小なり犠牲はつきものだ。和を大切にする日本文化においては、隣人やクラスメイト、チームメイト、職場の同僚にとって良かれと思えることを叶えるためなら、個人的に大切なことや必要なことを後回しにする。そのたびに日本人は日常的に自分の感情をコントロールしたり、人間関係を優先させて社会とうまく付き合えるように調整を図ったりしている。

チームのために自分を犠牲にすることはたいがいの場合、日本社会では称賛に値し、非常に価値あることとして受け止められるものだ。一九六四年のオリンピックでは、フライング・ダッチマン（FD）級というセーリング種目で一位という結果に終わった二人の選手がいた。しかし、日本人の心情としては、紛れもなく金メダルにふさわしい選手だった。

一〇月一四日、ラース・グナール・キエルと弟のスリグ・レナート・キエルは、ハヤマ号に乗ってFD級の七レースのうちの第三レースに出場していた。そんなとき、前方でヨットが転覆しているのが目に留まった。そのヨットに乗っていた二人の選手は相模湾に投げ出されていた。

とっさの判断で、キエル兄弟は投げ出されたオーストラリアのイアン・チャールズ・ウィンター選手のほうに舵を取り、彼を海から引き揚げた。そして今度は転覆したオーストラリアのディアブロ号のほうに向かい、もう一人のジョン・グレゴリー・ダウ選手もハヤマ号に乗せて救助した。このオーストラリアチームの他にも六艇が同じように悪天候のためにレースを完走できずに途中棄権した。そんななか、スウェーデンのキエル兄弟は、二人の選手を救出しながらも何とか完走した。

キエル兄弟のこの勇気ある行動は、日本で全国的に報じられた。大義のためなら自己犠牲もいとわなかった二人のスウェーデン人選手のもとには、日本中から彼らを称える手紙や贈り物が続々と届いた。

ほかにも大々的に報じられたのは、日本女子バレーボールチームのキャプテンが、チーム、そして日本のために身を捧げたという話である。キャプテンの河西昌枝は三一歳。大半のチームメイトと比べて六つか七つは年上だった。そもそも、一九六二年の世界選手権でソ連を破り、日本を初の世界一へ導いたのを最後に引退して結婚するつもりでいた。実際、現役を続けるよりも、結婚して子どもを産むという、当時の日本人女性としての生き方をとるべきだといった見方もあった。河西自身も家庭を築いて新たな人生を始めたいと表明していた。

しかし結局、一九六四年の東京オリンピックで日本が金メダルを取って栄光をつかむことへの期待が非常に高まっていたので、河西は現役続行に踏み切り、二年以上にわたって過酷な練習に耐える日々を送ることになった。それでも、こうした自己犠牲は最終的に報われ、東京オリンピック後には大きな注目を集めるなかで河西は結婚式を挙げた。



さらに、秋田出身の伝説的なベテラン体操選手である小野喬にまつわるこんな話もあった。は一九五二年、一九五六年、一九六〇年のオリンピック三大会ですでに一二個のメダル（そのうちの四つは金メダル）を獲得していた。一九六四年のオリンピックのときは三三歳で、日本代表の中では小野最年長だった。

小野のいちばんの得意種目は鉄棒だった。男子団体で金メダルを取るには、小野のベストの演技が不可欠だった。だが、オリンピックに向けた練習で右肩を痛めてしまい、激痛に苛まれていた。苦痛を和らげるために麻酔薬を打ったが、その結果、右腕全体の感覚がなくなってしまった。

日本映画大学教授の大友りおが「Narratives of the Body and the 1964 Tokyo Olympics」という記事の中で小野について触れているところによれば、彼のケガは東京オリンピックで大きな話題となり、作家の三島由紀夫も次のように捉えていたという。

練習時間のあいだから、鉄棒は彼の肩を冷酷に責めていた。そのとき肩は、彼の目ざす完璧さの敵になり、敵軍に身を売ったスパイのように彼を内部から苦しめていた。

あまり知られていないのは、女子体操代表としてオリンピックに出場していた、小野の妻の清子やそのチームメイトが心配していたことだった。大友によると、小野は感覚のない腕を使った難易度の高い離れ技に挑むことになっていたが、落下すれば大ケガをする恐れもあった。それでも鉄棒に向かう夫を心配して、清子はこうささやいた。「死んじゃだめよ。私たちには子どもたちがいるんですからね」

小野は無事に演技をやり遂げただけではなく、その日に見せた頑張りのおかげで、男子団体は金メダルを勝ち取った。